

T.E.ロレンス研究の変遷と問題点

稲村 美貴子

はじめに

1993年9月13日、ラビン・イスラエル首相とアラファト・PLO議長が、クリントン・アメリカ大統領を中心にして遂に握手をかわしたことは記憶に新しいところであろう。パレスティナという中東の一角から発生したユダヤ教・キリスト教・イスラム教という宗教を背景に、この2000年間、中東地域を含むヨーロッパにおいて様々な歴史的出来事が展開してきた。ユダヤ・キリスト教の対立はヨーロッパ世界に「ユダヤ人問題」を存在させてきた。またイスラム・キリスト教の衝突は7世紀のイスラム成立以来「アラブ人」の征服・拡大により、まさにアンリ・ピレンヌ⁽¹⁾をして“マホメットなくしてシャルルマーニュなし”と論じさせた世界史的大問題であった。さらに12世紀以来逆転の発端となった十字軍、そして1492年のグラナダ陥落という大転機が大航海時代へと繋がっていくことは世界史の常識であろう。しかしこの時以来ヨーロッパから中東へと移ったユダヤ人（セファルディム系）、徐々に“征服者”から“従属者”へと衰退したアラブ人とは共にアジア系トルコ人の征服国家オスマン・トルコ帝国に組み込まれ、ミレット制⁽²⁾などにより曲がりなりにも共存して来たことは見過ごされがちである。

さらに16世紀から続くヨーロッパ諸国の覇権をかけた生存競争のなか、イギリス・フランスの拡大は中東へと及んだ。1914年7月サラエボの一発の銃弾が世界未曾有の「世界大戦」を引き起こしたことは衆知のことであろう。当然ヨーロッパの大国でもあった中東の支配者オスマン・トルコ帝国も巻き込まれずにはいられなかった。イギリスは帝国の生命線“インドへの道”の防衛のためオスマン・トルコ帝国に代わる相手を探さねばならなくなり、アラブ・ユダヤの両民族とも歴史の表舞台に再浮上してくる契機をつくったのである。「世界大戦」の結果、新たに中東の支配者となったイギリス・フランスの下、「中東問題」が生じて来る。つまり「中東問題」とは歴史的にみれば80年間たらずの問題であり、極めて現代的な紛争であるにもかかわらず、とかくアラブ・ユダヤの対立の「歴史的根深さ・長さ」が強調され「神話化」されてきたのである。

この「中東問題」が論じられ、当然の如くにイギリス帝国主義の二枚舌外交が非難・糾弾される時、必ず上る名前が「アラビアのロレンス」こと T.E. ロレンスである。彼は、名のみ高く様々なイメージに彩られ「神話化」され、実像は曖昧なままという人物たちの典型的な一人なのである。T.E. ロレンスの伝記は実に30冊を越え、まさに毀誉褒貶甚だしく、研究者の専門分野も広範であり、47年という生涯に比して膨大なものがある。ではロレンスについては解明されているかといえそうではなく、多様なイメージのみが「神話化」され、客観的伝記すら未だ少ないという状態なのである。そこでここでは「中東問題」の転換点でもある現在、従来のロレンス研究の問題点を指摘し、ロレンス像の変遷を概観することによって、今までのロレンス研究をまとめてみたい。

(1) T.E. ロレンスの略歴

まず年代記的にロレンスの生涯を概観しておきたい。トーマス・エドワード・ロレンス Thomas Edward Lawrence は1888年8月16日、ウェールズ、カーナヴォン州 Caernarvonshire トレマドック Tremadoc に生まれる。父、トーマス・R・タイ・チャップマン Thomas R. Tighe Chapman はアングロ・アイリッシュの準男爵家の大地主の出身。母はそのチャップマンの娘たちのガヴァネスであったサラ・ジュンナー Sarah Junner。彼女はのちにロレンス姓を名乗るがサラ自身がヨークシャー地方の名家ロレンス家の庶子であった⁽³⁾。T.E. ロレンスはこの両親の間の庶子の次男として生まれた。(兄のモンターグ・ロバート Montag Robert は1885年にダブリンで生まれている。) T.E. の生後三カ月でスコットランドのキルクブリー Kirkcudbright に転居。三男ウィリアム・ジョージ William George 生れる。マン島を経てブルターニュに移る。1891年フランスにて四男フランク・ヘリヤー Frank Helier 生れる。1894年イングランドのニューフォレストを経て1896年オックスフォードに落ち着く。(1900年末弟アーノルド・ウォルター Arnold Walter 生れる。) 1896年9月オックスフォード・ハイスクール Oxford High School for Boys に入学。早くから中世史に興味を持つ。1907年10月、オックスフォード大学、ジーザス学寮 Jesus College 歴史学専攻に入学。1908年夏休み中、フランス中世の城郭研究のため自転車旅行⁽⁴⁾。翌1909年夏休み、卒業論文⁽⁵⁾のため初の中東旅行。主としてパレスティナ・シリアの十字軍城郭を徒歩で調査。1910年、優等 First Class で卒業。

同年、モードレン学寮 Mogdren College の奨学金を得て、大英博物館によるカルケミッシュ Carchemish のヒッタイト遺跡発掘に参加。著名な考古学者 D.G. ホガース D.G. Hogarth の下、レオナード・ウーリー Leonard Woolley らとともに働く。1911年夏期休暇中、単独でイラク旅行⁽⁶⁾。1913年12月、パレスティナ開発財団 Palestine Exploration Fund 主催の、パレ

スティナにおける聖書遺跡調査にウーリーと共に参加。これは名目は学術的調査であったが、エジプト長官であったキッチナー Kitchener⁽⁷⁾の極秘命令による、当時まだ不明であったこの地域の地図作成が真の目的であった。帰国後、報告書⁽⁸⁾をまとめるうちに大戦勃発。志願するが不採用となり、ホガースの推薦を得て、7月陸軍省作戦部第四課地図班に勤務。12月カイロに転勤。1915年3月、ダーダネルス作戦、ガリポリ戦失敗。(この年、弟のウィリアム、フランクともに西部戦線にて戦死。) イギリスの苦戦が続くなか、インド軍のメソポタミア侵攻作戦も難行し、ロレンスはクート Kut おけるタウンゼント將軍救出交渉に派遣されるが、タウンゼント將軍は降伏し失敗に終わる⁽⁹⁾。このことは後のインド省・インド政庁との確執の原因となる。カイロ到着後、陸軍省から外務省に転属。カイロ陸軍情報部のクレイトン Clayton らにより外務省管轄下アラブ局 Arab Bureau が設立され、ホガース、ウーリー、ガートルード・ベル Gertrude Bell ら中東関係考古学者たち「アラブの専門家」やアラビストが集められ、アラブ地域の研究・調査の結果を軍やその他の関係省庁に配布する仕事に従事する⁽¹⁰⁾。さらにこのアラブ局が推進していた、“アラブ人たちをオスマン・トルコに対して反乱を起こさせる戦略”に深くコミットするようになる。

1916年6月5日、ヒジャーズ Hejaz 地方にてメッカのシャリフ Grand Sherif of Mecca であるハーシム家 Hashemites のフサイン Hussein が四人の息子と共にアラブ反乱 Arab Revolt を起こす。苦戦のなかロレンスは政治将校として派遣され、三男ファイサル Feisal のもとアラブ正規軍を組織し、連合軍エジプト派遣軍の一翼を担う。一方、自らはベドゥインとともにゲリラ活動を行う。西部戦線が膠着するなか、1917年7月アカバ港占領、同年12月エルサレム占領⁽¹¹⁾。1918年10月1日アラブ北軍ダマスカス占領。ロレンスは即刻帰国し外務省のカーゾン Curzon 主権による東方委員会 Eastern Committee に「アラブ再建」⁽¹²⁾を提出。これがロレンス案としてオスマン・トルコに代わる「ハーシム家の血縁による緩やかなアラブ連合国家」を建設するというもので、パリ講和会議に向けてのイギリスの中東政策案のたたき台となったものである。外交活動をする傍ら、世論を喚起するため新聞を使ってペンによるキャンペーンを開始⁽¹³⁾。1919年1月、英国全権団の一員としてファイサルと共にパリ講和会議に参加。5月エジプトに赴く途中飛行機事故に遭い九死に一生を得る。イギリス・フランスの利害が対立するなか、フランス、インド省、外務省の圧力により解任される⁽¹⁴⁾。

10月オックスフォード大学オールソールズ学寮 All Souls College のフェローとなり7年間の奨学金を得て、アラブ反乱史としての『知恵の七柱』⁽¹⁵⁾(Seven Pillars of Wisdom) を執筆。1920年ファイサルとフランスの対立が激化するなかオスマン・トルコへの戦後処理は先送りされたままヴェルサイユ条約調印。さらにイギリス・フランスの妥協が成り、サンレモ最高会議において、委任統治案が採択されイラク・パレスティナはイギリスの委任統治、シリア

はフランス委任統治となる。ファイサルはフランス軍によりシリアから追放され、ヒジャーズのみフサインを王として存続。しかしイラクにおけるイギリス統治に対するアラブ暴動が激化するなか、1921年2月、チャーチル植民大臣は、外務省・陸軍省・インド省に分散していた中東関係部門を植民省管轄下の中東局に統合し、アラブ問題処理に乗り出した。チャーチルはロレンスをアラブ関係政治顧問として招聘。再び中東へ赴き交渉の結果、イラク王にファイサル、ヨルダン王に次男のアブドゥラ、ヒジャーズ王はフサインと、シリアの委任統治を除く三地域にロレンス案が採用され、1921年3月、カイロ会議 Cairo Conference¹⁶で正式に合意された。

1922年7月公的生活から引退。8月空軍にジョン・ヒューム・ロス John Hume Ross の名で一兵士として入隊。1922年12月デイリー・エクスプレス紙の暴露記事¹⁷により空軍除隊処分となる。1923年3月 T.E. ショー T.E. Shaw の名で陸軍戦車隊 Royal Tank Corps に入隊。ボヴィントン・キャンプ Bovington Camp 近郊にクラウドズ・ヒル Clouds Hill Cottage を入手。バーナード・ショー、トーマス・ハーディ、E.M. フォスターらの文学者との親交を深める。1925年空軍に復帰。1926年12月、インドのカラチに転勤。この間『オデュッセイア』を翻訳。1928年アフガニスタン国境のミランシャー Miranshah に転属するが、折りからのアフガニスタン国境の紛争のため、スパイ活動に従事しているとの疑惑により労働党議員の要請により帰国。今回は誤解とのことで空軍にとどまる¹⁸。1935年2月26日空軍除隊。新聞、ジャーナリストに追いかけるなか、ヘンリー・ウィリアムソン Henry Williamson への電報を打って帰る途中、1935年5月13日、ドーセット州 Dorset クラウドズ・ヒル近郊でオートバイ事故を起こす。ボヴィントン・キャンプ内陸軍病院にて意識不明のまま六日後5月19日死亡。5月21日、モートン Moreton のセント・ニコラス教会 St. Nicolas Church にて各活動分野での六人の友人が棺を持ち¹⁹、チャーチル、ナンシー・アストア Nancy Astor、トーマス・ハーディ夫人らの出席のもと葬儀。ウェアラム Wareham のセント・マーティン教会 St. Martin Church にはエリック・ケニントン Eric Kennington 製作のアラビア服を着た彫像が安置され、1936年1月セント・ポール大聖堂にて友人達により追悼式が行われ、地下霊暗室にはエリック・ケニントン作の胸像が置かれている。

以上、ロレンスの略歴を述べてきたが、現在までに確認され一応「客観的事実」といわれているものは数少ない。しかしこれらについて膨大な量の伝記・評伝が書かれてきたのである。次に「客観的事実」を研究する際の問題点を考察してみたい。

(2) ロレンス研究の問題点

①専門分野

まずロレンス自身のキャリアが多岐に渡っているという問題がある。略歴からも解るように、彼の活動分野は広範囲に及んでいる。中世史家、考古学者、アラビストとしての学問的分野。軍事、政治、外交の分野。文学者、芸術家としての分野。さらに晩年は空軍で高速艇の開発に従事するなど工学技術者としての業績が加わる事になる。そして各分野における彼の水準は高く、それぞれの専門家たちが論じ、研究しているので、各分野に渡る正確な伝記・評伝を書くことは極めて困難なことに成らざるを得ない。

②証言・回想

次にイギリスにおけるロレンス研究が独特に持つ問題点がある。それは第一次世界大戦の後遺症ともいえるが、大戦中のロレンスの反対勢力が未だに反感を持っており、反ロレンス伝に影響を与えているということである。まずインド省²⁰⁾関係者による政治的反感が根深く、反ロレンス的伝記には必ず彼等の「証言」が引用される。また当然の事ながらパレスティナ問題と深く関わることなので、アラブ・ナショナリスト²¹⁾、ユダヤ・シオニスト²²⁾の両勢力と関係のある、或いはあった政治家、政府関係者の双方からの反感・非難が反ロレンス的伝記の根拠として使われる。さらに第一次世界大戦がイギリス社会において持っている独特な位置から派生する問題がある。それは第一次世界大戦の退役将校たちの複雑な心理、社会的立場と関わってくるのであるが、彼等退役将校たちは戦後の大転換期をその名誉と誇りに生きた者が多数いた。しかしロレンスはそれらを捨てたことにより彼等を傷つけたのである。そのため彼等の回想録、或いはロレンスについての言及は、反ロレンス的傾向を帯びるのである。

また早くから有名になったため直接知っている人達、同時代人たちの「証言」・「情報」というものが多数存在する。これも一次資料に近いものではあるが、友人達に著名人が多く、また生前からジャーナリズムに載ることが多かったため、発言やコメントが広く喧伝される可能性が高いので、各人が真実を語っているかどうか疑問であり、書簡同様矛盾も多く取扱いには充分配慮する必要がある。

③資料

さらにロレンス関係資料について重大な問題がある。まず公的資料についてであるが、政府関係のものは従来50年間未公開の原則であったので、何等かの原因で暴露されてしまったもの以外は、1968年まで公開されていなかった。1968年に期限が30年に短縮され第一次世界大戦中、大戦直後のものが公開されるようになった。しかし、ロレンス関係のものは各省庁

に渡り、量も報告書・覚書き・極秘文書など膨大なものがあり、その後も整理は遅々として進まなかった。しかもロレンスと関係のあった政治家や政府高官、軍関係者たちの資料は個人文書となっているものもあり、未公開或いは限定公開のものも多い。また近年のイギリスの経済状況を反映して、記録保管状況²³が公的資料の研究を困難にしている。さらにこのような資料を研究することは、大学関係の研究者から学位取得に不利なこともあって敬遠されがちである。

次にロレンス個人の私的資料であるが、一つにはロレンス自身が公開期限を指定したものがあつたため、断片的なものを推測で補うしかなかった時期が続いたが、生誕100年にあたる1988年ごろから様々な努力によりようやく出揃ってきた。しかしロレンスは手紙マニアともいえるほど大量の書簡を書いており（4000通ともいわれている²⁴）、収集も大変である。またロレンスが早くから著名人であつたため散逸は免れているが、受取人もまた著名人である場合、個人文書として限定公開となっているものも多い。また金銭的価値を持っているので個人所有になったものなど未公開のものが大部あると予想されている。また書簡という私的なものの性質上、同時期に書かれたものでも異なることが書いてある場合も多く矛盾が多いため資料分析の際、慎重な配慮をしないと論争の泥沼になる危険性を持っている。

④アラブ反乱研究

最後に「歴史的伝記」に最も大きな問題となっているのは、T.E. ロレンスを「アラビアのロレンス」として有名にしたアラブ反乱の研究が不十分であることが指摘できよう。もとより「中東問題」という現代の大問題については、中東研究者たちにより多くの研究が成されてきているが、現代の政治と密接な関係があるため一つには研究者自身の政治的立場からのバイアス（プロ・アラブ、プロ・ユダヤ等々）から逃れにくいという問題がある。さらに研究すること自体が政治的立場の表明となってしまうという状態であつた。また中東地域の激変により、問題はアラブ反乱という原点を乗り越え、主として「パレスティナ問題」へと移ってしまった。しかもフサイン王は、イギリス・インド省が後援するイブン・サウドに敗北しヒジャーズを追われ、イラクではファイサル王が暗殺されその後イラク王国は打倒されたため、唯一存続しているのはヨルダン王国だけである。こうしたアラブの激動によりアラブ側からの資料が非常に少ないこと、また未公開のものが多いということもアラブ反乱研究を困難にしている原因である。

つまりイギリス側の資料は公開されたがようやく整理に着手し始めた段階であり、アラブ側資料はほとんど未公開という状況である。その結果、サイクス・ピコ協定、フサイン・マクマホン書簡、バルフォア宣言の「解釈」²⁵にほとんど費やされて来たといえる。アラブ反乱もまた名のみ高く実態の研究が遅れているのである。

以上ロレンス研究における諸問題を指摘したが、最後に主なロレンス伝・ロレンス像の変遷を概観しておきたい。

(3) ロレンス像を形作った伝記

①ロレンス神話の創世記

1919年8月14日、アメリカ人ジャーナリストのロウエル・トーマス Lowell Thomas は「パレスティナのアレンビーとアラビアのロレンス」との題でドキュメンタリー映画と講演をロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスで行い、記録的動員数により1921年1月までロングランを続けた。ここに一躍「アラビアのロレンス」がセンセーショナルに登場することとなった。彼はこの講演をもとに“With Lawrence In Arabia”²⁶⁾(1924)を出版した。この興行の時期、ロレンスはパリ講和会議に奔走しており、フランスやインド省と対立し形勢は不利であったので、アラブに無関心な世論の注目を引こうとしていた事もあり、このトーマスの英雄伝説創出を拒んだわけではなかった²⁷⁾。しかしこれにより予想を越えて著名人となり、まさにロレンス英雄伝が生まれ、神話が造られ売られていくこととなった。そしてロレンスに関する情報への需要の高まりとともに、友人二人によって伝記が書かれる。作家で詩人のロバート・グレーヴス Robert Graves の『アラビアのロレンス』²⁸⁾(1927年)である。これは『知恵の七柱』が公表されないため、アラブ反乱のダイジェストとして書いたものであり、グレーヴス自身の経済的困難を打開するためにロレンス自身が書くことを許可したのもであった。もう一つは軍事評論家のB. リディル＝ハート B. Lidell-Hart の“T. E. Lawrence In Arabia and After” (1934)である。この本はロレンスのゲリラ戦について高く評価したものであった。この二作についてはロレンス自身書簡を書いて様々な質問に答えている²⁹⁾。これら三作が生前にでたロレンス伝である。また自らも公的生活を引退した後は文筆活動を行い、戦車隊での生活を綴った“The Mint” (1955)を執筆し、フランス人作家のコルボー Corbeau の“The Forest Giant” (1924)を翻訳したり、インドでは『オデュッセイア』³⁰⁾The Odyssey (1932)の翻訳を行っている。しかし“The Mint”の公開を1950年以降と断っているため、発表されたのは二冊の翻訳本と『知恵の七柱』豪華本作製費の借金返済のため、自ら『知恵の七柱』ダイジェスト版として出した『砂漠の反乱』³¹⁾Revolt In the Desert (1927)のみである。しかし第一次世界大戦後のイギリス社会における一般大衆の失望の反動として、ロレンスは「無冠の帝王」、「ダイナマイト王子」等々派手なタイトル³²⁾をつけられ、被圧迫民族のアラブを助け、その独立に命を賭けダマスカスを解放した、ロマンティックな英雄像としてセンセーショナルに広められていったのである。「それは魅力あふれた伝説でありその結果、ウィンストン・チャーチルを除けば、ロレンスは恐らく、今世紀でもっとも著名なイギリス

人の一人であろう。」³³

②人間ロレンスの追及

1935年の突然の死は、ちょうどナチズム台頭の時でもあり、様々な憶測が流れ大きな話題となった。そのため主として末弟のアーノルド・ウォルターによりロレンス関係の資料がある程度公開された³⁴。話題の書となっていた『知恵の七柱』は普及版が英米同時に公刊され、友人ディヴィッド・ガーネット David Garnnet 編集で“The Letters of T. E. Lawrence” (1938) もだされた。しかし、未だ英雄像はウィンストン・チャーチルの「我々の必要とするものが何であれ彼のごとき必要な存在に二度と会うことは無いであろう。」³⁵の言葉に要約されていると言えよう。

第二次世界大戦後、再び世界は大きく変化し、イスラエル建国に続き「中東問題」が発生し、「石油」をめぐる利害も錯綜するなか中東は欧米にとって重要地域となった。世論の動向も一変し「神話」や「英雄伝」の破壊が大勢を占めるようになると、ロレンス研究と言えるものが始めてくる。まず実存主義者たちによって「人間ロレンス」の研究がなされ評論的伝記が書かれ始める。終生フランス嫌いといわれ政治的にフランスから敵視されたロレンスという人物に、現代の不安定性と不条理の中の人間性の喪失と絶望をみたフランス人実存主義者たちが、第二次世界大戦後いちやくロレンスに眼を向けた。このことはロレンスへの二十世紀的人間という観点からのアプローチとなった。1950年ロジェ・ステファン Roger Stéphan がサルトルの序文付きで『冒険者の肖像…行動的精神の軌跡』³⁶を著したが、矛盾と不条理のなかでの行動人のロレンスを論じユニークな伝記となっている。一方、イギリスではロレンスの家族（特に母親）・友人・知人が生存していることもありなかなかロレンス神話への反論は出なかったが、1955年リチャード・オールディントン Richard Aldington の“Lawrence of Arabia: A Biographical Enquiry” が出版され賛否両論が沸き上がった。これは、著者自ら「ロレンス神話を煽ってきた友人たちの書いたものを批判するものです。」³⁷と述べているように、友人たちの回想録“T. E. Lawrence By His Friends” (1937)などを批判したものである。彼は、フランスのアラブ反乱派遣将校であり反ロレンスの急先鋒であったブレモン大佐 Colonel Bremond やロレンスの反乱当時の上司³⁸、同僚³⁹などの出版物を駆使して徹底的にロレンスを批判しているが、使用した資料の限界がありロレンスを批判したものであれば無批判に取り入れているため事実誤認が多数ある。だがその後続々と出る反ロレンス伝の先駆的地位は変わらない。またこの時の世論沸騰の中、1956年にコリン・ウィルソン Colin Wilson 『アウトサイダー』⁴⁰が出て実存主義的アプローチを行いこのロレンス像のほうが定着していく。

③錯綜するロレンス像

暫くは沈静化したが1960年代に入ると、1962年またしてもセンセーショナルな“ロレンス・ブーム”が起きた。これは映画『アラビアのロレンス』⁴¹⁾の出現によるものであることは有名であろう。この映画によりアメリカでのロレンスの名は不動のものとなったとあってよい。また最も広く流布したロレンス像であろう。このことの功罪は大きいとさらに数多くの伝記が書かれ売られていったことは確かである。この映画はもはや単なる英雄像ではなかったが「悲劇的人間像」というとらえかたであったため、逆に「挫折せる革命家」という一種のロマンティズムの復活があった。1962年にヨルダンの歴史家スレイマン・ムーサ Suleiman Mousa は“T. E. Lawrence: An Arab View” (英訳は1966年)⁴²⁾を著した。この著作は未だに唯一とあってよいアラブ側からのもので、アラブ反乱についてアラブ側の証言に基づいて論じたものである。『知恵の七柱』の記述を取り上げロレンスの功績は全てアラブ人のものであったと主張しているが、イギリス側の公文書をあまり使用せず貴重ではあるが、アラブ人ひいてはハーシム家の過大評価など偏りがあることは否めない。

1967年6月5日の第三次中東戦争勃発に伴い、アラブ・ナショナリズムが高揚するなかロレンス批判も高まった。1968年アーノルド・トインビー Arnold Toynbee は『交遊録』の「ロレンス大佐」の項で次のように述べている。「ここ数年来、T. E. ロレンスの“仮面を剥ぐ”ことが文筆家の間の一種の流行になっている。いままでにこのテーマを扱った書物がたくさん出ているが、そのような本を書こうとする衝動は一向衰えを見せず、またそういう本が出ると、なかなかよく売れる。これらの書物の中に述べられている、ロレンスを傷つけるような事実が、かりに全部真実と仮定しよう。それで一体何が証明されたのか。ただ以前からわかっていたこと、わかっていなければならなかったことが証明されたにすぎない。暴露家たちの発見したことはロレンスが人間だった(中略)ということである。ロレンスは確かに彼のうちに、何かを持っていた。暴露家たちが攻撃の矢を射つくし彼の人間的欠陥が暴かれても、彼の偉大さは少しもそこなわれずに残るであろう。」⁴³⁾

④帝国主義者ロレンス

そしてこの時まさしく“仮面を剥ぐ”最大の書物が刊行された。フィリップ・ナイトリイ Phillip Knightley, コリン・シンプソン Colin Simpson というジャーナリストによる『アラビアのロレンスの秘密』(1969)である。これはサンデータイムズ紙の後援のもとに幅広く取材して当初紙上連載をして評判を取り本にまとめたものである。この本には三つの“暴露”が含まれている。一つはロレンスが若い頃からホガスによってスパイとなるべく訓練されていたというスパイ説。もう一つはそれと関連してイギリス帝国主義の手先であるロレンス帝国主義者論。さらに従来から取り沙汰されていた性的スキャンダルについてホモセク

シュアル説に加えて、晩年の鞭打ちが暴露されマゾヒズムが喧伝されるようになったことである。つまりこの著作はその後のロレンス像を決定づけてしまったのである。

1967年の第三次中東戦争は世界の眼を中東に向けさせそれにともない中東研究の一環としてのロレンス研究が中東研究者によって成されるようになった。1970年代はオイル・ショック、さらに OPEC の台頭とともにまさにアラブが「石油」を武器に世界的中心となった観があった。その為中東研究はアラブ寄りの傾向を示したことは否めず、イギリス帝国主義批判に加えて「オリエンタリズム」とオリエンタリストに対する批判⁴⁴⁾が高まった。当然それに呼応して帝国主義者ロレンス、オリエンタリストのロレンスという批判が多く成された。ロジャー・オウエン Roger Owen は「オリエント研究は、…ムスリムの人々をヨーロッパの保護下におくには都合の好い正当性を与えたように見え、そのためそれを植民地主義の擁護者たちがたやすく利用することができた。…オリエント学者の関心を現代中東にむけさせた力の一つには、イギリス帝国の欲求があった。…十九世紀の終りごろ、数多くのオリエント学者や中東考古学者が直接政府の事業に雇われ始めた。それは、第一次大戦中にカイロにアラブ局が創設されたことによって頂点に達した。」⁴⁵⁾と批判している。またアンワール・アブデルマレク Anouar Abdel-Malek 著『民族と革命』には「この別グループの専門家というのは、大学教授・実業家・植民地軍人と官僚・宣教師・政治論述家・冒険家などの寄り合い世帯のことをさしている。かれらのただ一つの目標とは、占領支配する土地をよく認識し、その土地の原住民の意識のなかにはいりこみ、かれらのヨーロッパ列強への従属をいっそうたしかなものにするにほかならない。」と述べ、さらに「T. E. ロレンスとその一派に代表されるアラブ世界への心理的・政治的浸透」⁴⁶⁾とオリエンタリストの代表的人物としてロレンスを批判している。またハナ・アールント Hannah Arendt も『全体主義の起原 2 帝国主義』(1951)で「このアラビアのロレンスほどにきれいな手で〈大いなるゲーム〉に加わった者はなく、彼ほどに徹底して自分自身を実験台とし泰然とその結果を甘受した者はない。」⁴⁷⁾と論じている。そしてイギリスではオックスフォード大学のセント・アントニー学寮 St. Anthony College で中東研究が行われ、ロレンスは帝国主義批判と連動して論じられるようになった。また一方でロレンス自身の著作・資料の収集や編纂の努力がなされ始めた。しかし『アラビアのロレンスの秘密』の影響は強く精神分析医による伝記⁴⁸⁾がピューリッツァー賞を獲得したりした。

1980年代に入るとイギリスにおける中東研究はイギリス社会の研究と結び付けられるようになり、ロナルド・ロビンソン Ronald Robinson, ジョン・ギャラハー John Gallagher らの「公式帝国」・「非公式帝国」⁴⁹⁾という概念の提唱などにより帝国主義者ロレンスが1970年代とは異なる視角から研究されるようになった。

⑤ ロレンスの実像を求めて

そして1985年の「没後五十周年」を契機にロレンスの再評価・再検討が始まった。その動きを加速したのは1988年の「生誕百周年」行事であった。オックスフォード大学のボドリアン・ライブラリー Bodleian Library において展示会⁶⁰が、1988年9月12日から11月26日まで催され、さらにロンドンではナショナル・ポートレート・ギャラリー National Portrait Gallery で10年の歳月をかけて収集した展示会が、1988年12月9日から1989年3月まで行われ大変評判であった。またクラウズ・ヒルのあるドーセット地方を中心にロレンス協会 Lawrence Society も作られるなど、ロレンスの多方面に渡る業績の再評価⁶¹が行われている。1993年には文学的活動をまとめたものも刊行され⁶²、ロレンス関係資料は非常に充実してきた。さらに今後は政府関係文書が整理されれば資料はようやく揃うことになる。

まとめ

以上ロレンスの略歴、ロレンス研究の問題点、及びロレンス研究の変遷を概観してきたが、1995年は没後六十年になる。中東問題の一応の妥協が成されつつある現在、政治的イデオロギーに左右されずに客観的な伝記が書かれる可能性がでてきたといえよう。さらに各分野において地道な研究が進行しつつあり再評価の動きが見られるが、今ようやく T. E. ロレンスが歴史として扱える時代に入ったといえるのではないだろうか。今後は従来アラブ・ユダヤ双方から批判されてきた、ロレンスのアラブとユダヤの協力への主張について再検討する必要がある。彼は中東に足を踏み入れた第一歩からパレスティナのユダヤ人入植地に眼を止め、「ユダヤ人が入植した地域がよく開拓されており、彼等が耕作すればパレスティナはもっと豊かになる」⁶³と述べている。さらにファイサル・ワイツマン会談の際もアラブとユダヤの協力を提案している。1920年には「(ユダヤ)の技術供給はアラブ世界のヨーロッパ産業からの独立に寄与し、新しい同盟は世界列強の脅威となるだろう。」⁶⁴と述べ、アラブとユダヤの協力が中東発展の鍵であることを指摘している。またサンレモ会議に際し、ともに第一次世界大戦当時は未成熟であった両民族の共通の利益のために、アメリカのユダヤ人との協力と共闘を画策したのも彼であった。また大きな枠組みとして「私の問題点は帝国主義の誤りからイギリス・フランスを救うことにあったのです。大英帝国にとって、自由意思による連帯というのは大きな未来を与えているのです。イギリスは大きなスケールの“条約による連邦国家”となるべきだと思うのです。」⁶⁵とすでに英連邦論を展開している。こうした彼の政治的主張や中東論を再検討することは今後の中東研究に寄与するところが大きであろう。またイギリスの中東政策についても、単に批判を繰り返すだけではなく、その失敗の原因を検討する必要があると考えるが、イギリス中東政策のなかの大きなファクターとして、今後

ロレンス研究は重要になってくるのではないかと思う。

*注のなかに参考文献が含まれているので参考文献を別記しない。また邦訳のある文献は本文中に『 』を使って表記した。邦訳の無いものは原題名を表記した。

注

- (1) アンリ・ピレンヌ増田四郎監修・中村・佐々木訳『ヨーロッパ世界の誕生…マホメットとシャルルマーニュ…』創文社 昭和35年を参照。
- (2) H. A. R. Gibb & Harold Bowen; *Islamic Society And West*, Oxford, 1957. vol. 2, pp. 212-61
- (3) Jeremy Wilson; *Lawrence of Arabia: The Authorised Biography of T. E. Lawrence*, London, 1989. pp. 941-944. (次からは *Authorised biography* と表記する。)
- (4) *The Home Letters of T. E. Lawrence and His Brothers*, ed., by M. R. Lawrence, Oxford, 1954.
- (5) 'The Influence of the Crusades on European military architecture—to the end of the XII th century' という題名の卒業論文。後に, T. E. Lawrence; *Crusader Castles*, London, 1936. として限定出版された。1992年に, Michael Haag の序文付きで再出版された。
- (6) 'Diary of A Journey Across the Euphrates' in, *Oriental Assembly*, ed., by A. W. Lawrence, London, 1939. pp. 5-62.
- (7) 'Lord Kitckener and the Arab National Movement' in *British Documents on The Origin of the War, 1898-1914*, eds., by H. W. V. Temperley & G. P. Gooch, HMSO, London, 1926-38. vol. X, pp. 824-838.
- (8) T. E. Lawrence & C. L. Woolley; *The Wilderness of Zin*, London, 1937.
- (9) *The Letters of T. E. Lawrence*, ed., David Garnett, London, 1938. pp. 203-210. (次からは Letters と表記する。)
- (10) 'Arab Bulletin' として発行していた。当然極秘文書であり, その一部が外務省の許可をえて, *The Secret Despatch From Arabia*, ed., by A. W. Lawrence, London, 1939. として限定1000部が発行された。
- (11) ロイド・ジョージ 内村・片岡・村上訳『世界大戦回顧録』第六巻 68章 1917年の戦況とその結果 改造社 昭和15年 2856頁に「トルコ軍のこの敗退は, (中略) それ自身終局の勝利に真の貢献をもたらした。それが意気消沈の瞬間に連合軍に与えた激励は有益であった (略)」とこの時の戦果を述べている。
- (12) 'Reconstruction of Arabia' in *Letters*, pp. 265-269.
- (13) *The Times*, November 26-28, 1918, in, *Evolution of A Revolt*, eds., by Stanley & Rodell Weintaub, Pennsylvania, 1968. pp. 33-55.
- (14) 'To the Editor of The Times, September 11, 1919.' in *Ibid.*, pp. 63-65, and also, in *Letters*, pp 281-82. この寄稿文は西側世界で初めてフサイン・マクマホン書簡, サイクス・ピコ協定, バルフォワ宣言 (当時はロスチャイルド宛て書簡) を暴露したものであった。
- (15) T. E. Lawrence; *Seven Pillars of Wisdom*, London, 1935. の執筆状況については, Jeremy Wilson; *T. E. Lawrence*, National Portrait Gallery Publications, Catalogue Text, 1988. pp. 142-181 に詳細に述べられている。また文学的に分析・評論したのが Jeffrey Meyers; *The Wounded Spirit*, London, 1973. 邦訳は, T. E. ロレンス 柏倉俊三訳『知恵の七柱』全3巻 東洋文庫 平凡社 1969-1971年
- (16) Aaron S. Klieman; *Foundations of British Policy In the Arab World: The Cairo Conference of 1921*, Baltimore, 1970. に詳しい。
- (17) J. Wilson; *T. E. Lawrence*, p. 191.
- (18) *Letters*, pp. 631-636.

- (19) J. Wilson; *T. E. Lawrence*, pp. 231–232, Sir Ronald Storrs, Stewart Newcombe, Eric Kennington, 他3名が棺を担いだ。
- (20) Brighton C. Busch; *Britain, India and The Arabs, 1914–1921*, Berkeley, 1971
- (21) George Antonius; *The Arab Awakening*, Beirut, 1938, London, 1969.
- (22) Chaim Weizmann; *Trial And Error*, N. Y., 1949. Rep., 1972.
- (23) 英国公文書館 Public Record Office は、Chancery Lane にあったが外務省関係は新設の分館 Kew Gardens に移管中であり、大英図書館 British Library も移転途中である。
- (24) *Authorised Biography*, p. 11.
- (25) Elie Kedourie; *In The Anglo-Arab Labyrinth—The McMahon-Husayn Correspondence and its Interpretations 1914–1939*, Cambridge, 1976. また Isaish Friedman; 'The McMahon-Husayn Correspondence and the Question of Palestine' *The Journal of Contemporary History*, vol. 5, No. 2, 1970. pp. 83–122. *The Journal of Contemporary History*, vol. 5, No. 4, 1970. pp. 185–201. における Arnold Toynbee との論争など参照。
- (26) Lowell Tomas; *With Lawrence In Arabia*, N. Y., 1924. London, 1925.
- (27) *Letters*, p. 301.
- (28) Robert Graves; *Lawrence And The Arabs*, London, 1927. 邦訳は、ロバート・グレーヴス 小野忍訳『アラビアのロレンス』改造社 昭和15年。(改訳 東洋文庫 平凡社 昭和37年)
- (29) T. E. Lawrence; *To His Biographers, Robert Graves and Liddell-Hart*, London, 1938.
- (30) *The Odyssey of Homer*, trans., by T. E. Shaw (T. E. Lawrence), Oxford, 1935.
- (31) T. E. Lawrence; *Revolt In The Desert*, London, 1927. この本は借金返済後、出版を停止した。邦訳は T. E. ロレンス 柏倉俊三訳『砂漠の反乱』改造社 昭和15年。その後、角川文庫から1966年に再版された。
- (32) J. Wilson; *T. E. Lawrence*, p. 135.
- (33) Phillip Knightley & Colin Simpson; *The Secret Lives of Lawrence of Arabia*, London, 1969. p. ix. 邦訳は、フィリップ・ナイトリィ, コリン・シンプソン 村松仙太郎訳『アラビアのロレンスの秘密』早川書房 昭和46年
- (34) *T. E. Lawrence By His Friends*, ed., by A. W. Lawrence, London, 1937., *Letters To T. E. Lawrence*, ed., by A. W. Lawrence, London, 1962. また資料集として *The Essential T. E. Lawrence*, ed., by David Garnett, London, 1935. が出された。日本でもこの時期、中野好夫『アラビアのロレンス』岩波新書 昭和15年, 小林元『イギリスとロレンスとアラビア』博文館 昭和16年が相次いで出版された。日本におけるロレンスの本格的伝記はこの二作のみである。
- (35) *T. E. Lawrence By His Friends*, p. 161. ウィンストン・チャーチル Winston Churchill の回想。またこれは Winston Churchill; *Great Contemporaries*, London, 1937. pp. 155–167. 'Lawrence of Arabia' にも少し変えて収録してある。
- (36) Roger Stéphane; *Portrait de L'aventurier*, Paris, 1950. 邦訳はロジェ・ステファン 佐々木武訳『行動的精神の軌跡…冒険者の肖像』竹内書店 昭和42年。また同じ著者による Roger Stephane; *T. E. Lawrence*, (La Bibliotheque Ideale), Paris, 1960. がある。
- (37) Richard Aldington; *Lawrence of Arabia: A Biographical Enquiry*, London, 1955, p. 28.
- (38) Ronald Storrs; *Orientalisms* (Autobiography). London, 1937. 彼は葬儀のとき棺を担いだ一人でもあった。
- (39) Hubert Young; *The Independent Arab*, London, 1933.
- (40) Colin Wilson; *The Outsider*, London, 1956. 邦訳はコリン・ウィルソン 福田恒存・中村保男訳『アウトサイダー』紀伊国屋書店 1957年。

- (41) 日本におけるロレンスのイメージもこれに尽きるといってよいだろう。中野好夫氏は、『アラビアのロレンス』（岩波新書 昭和15年）を全面改訂し、1963年に出版し、その「まえがき」に「明らかに映画『アラビアのロレンス』の飛ばっちりである。」（前掲書、p.V）と説明している。また自著を補うものとして物語風伝記の、Robert Payne; *Lawrence of Arabia*, London, 1962.（ロバート・ペイン 中野好夫・沢崎順之介訳『アラビアのロレンス』筑摩書房 昭和38年）を訳出している。
- (42) Suleiman Mousa; *T. E. Lawrence: An Arab View*, trs., by Albert Butras, Oxford, 1966. 邦訳はスレイマン・ムーサ 牟田口義郎・定森大治訳『アラブが見たアラビアのロレンス』リプロポート 1988年。
- (43) Arnold J. Toynbee; *Acquaintances*, Oxford, 1967. p.178. 邦訳はA. トインビー 長谷川松治訳『交遊録』オックスフォード大学出版局 1968年。
- (44) 'Islamic Society and the West' by Roger Owen, in *Review of Middle East Studies I*, Ithaca Press, London, 1975.
- (45) ロジャー・オウエン 長沢栄治訳「イギリスの現代中東研究」『中東総合研究』第5号 1976年9月 アジア経済研究所 p.62
- (46) アンワール・アブデル＝マレク 熊田享訳『民族と革命』岩波書店 1972年 p.37-38
- (47) ハナ・アーレント 大島訳『全体主義の起原2 帝国主義』みすず書房 1972年 p.154
- (48) John E. Mack; *A Prince of Our Disorder—The Life of T. E. Lawrence*, Boston, 1976. また『アラビアのロレンスの秘密』と同種の主張を展開しているのが次の本である。Desmond Stewart; *T. E. Lawrence*, London, 1977. 邦訳は、D. スチュアート 上村巖訳『裸のローレンス』上・下 講談社文庫 昭和55年。
- (49) ジョン・ギャラハー、ロナルド・ロビンソン「自由貿易帝国主義」ジョージ・ネーデル、ペリー・カーティス編 川上ほか訳『帝国主義と植民地主義』御茶の水書房 1983年 pp.151, 156-58.
- (50) Bodleian Library; *T. E. Lawrence—The Legend and the Man*, oxford, 1988.
- (51) Stephen Tabachnick & Cristopher Matheson; *Image of Lawrence*, London, 1988. 邦訳は、ステイーヴン・E. タバクニック、クリストファー・マセスン 八木谷ほか訳『アラビアのロレンスを探して…揺れる英雄像』平凡社 1991年
- (52) *Lawrence of Arabia, Strange Man of Letters*, ed., by Harold Orlans, London, 1993.
- (53) *Letters*, p. 74
- (54) *Oriental Assembly*, p. 93.
- (55) *Letters*, p. 578.